

教育委員会だより

令和6年7月24日号 多治見市教育委員会 教育総務課

くめざす子ども像
お互いを尊重し、
主体的に学び、
挑戦する多治見の子

NEXT GIGA ～GIGA スクール活用推進PJ会議～

7月18日（木）に、GIGA スクール活用推進プロジェクト会議を開催しました。本会議は、国のGIGA スクール構想を多治見市で具現していくためのいわば“エンジン”ともいえる組織です。めざす子どもの姿を「ICT機器を活用し、情報活用能力を高め、学びを深めることのできる子ども」とし、重点目標を「自ら判断してデジタル社会を安全に行動できる児童生徒の育成」と定めています。

具体的に本年度は、①日常の「文具」としての端末活用、②デジタル指導書活用環境の整備、③新たな端末の調達準備等に取り組んでいます。このような取り組み内容ですので、メンバーも学校関係者（校長・教頭・教務主任等）の委員に加え、教育委員会事務局（ICT教育推進員を含む）と委託業者が参加しています。

今回は、県教委の学力向上総合推進事業「ICT活用アドバイザー派遣」を利用し、岐阜聖徳学園大学教授の玉置 崇 先生による講演会を実施しました。テーマはズバリ『NEXT GIGAで実現したいこと』。ここでは、ご講演の中で私の印象に残った点をいくつか（極々一部）を紹介させていただきます。

- 1人1台端末は『令和の学び』を具現するためのスタンダード（必須アイテム）
- 子どもの学びが自律的でなく自信も無いのは、指導が丁寧（過ぎ）だから？
- 端末の使用頻度は高いが、子ども同士がつながることに活用できていない
- 「（指導者に）個別最適化された学び」△、「（学習者にとって）個別最適な学び」○
- 自己の学びの振り返り（学びの調整・メタ認知）が、主体的な学びにつながる
- 「仲間と学ぶと自分が分かる（他者参照）」のために協働的な学びが求められる
- 自ら学びを調整する力を育むことで、“鵜飼型授業”から脱却する
- 心理的安全性を感じることができる教室（人間関係）が基盤となる

総じていうと「ICTの活用次第で、今求められる学習者主体の学びの具現にグッと近づける」ということになるのでしょうか。お話の中で「多治見市は、すでにNEXT GIGAに入っている」というお言葉もいただきました。これからも、本会議を核としてNEXT GIGAの取り組みを力強く推し進めていきます。



自立を支援する ～インクルーシブ教育推進委員会～

7月19日（金）に、本年度第1回のインクルーシブ教育推進委員会を開催しました。『インクルーシブ教育推進たじみプラン』に基づき「みんなが伸びる、みんなと伸びる 自立を支援する教育の推進」をテーマに取り組んでいます。委員長は、南姫小学校の 山口 政有 校長先生（新任）。副委員長を、兵庫教育大学大学院の 宇野 宏幸 先生（継続）にお務めいただきます。半数以上の委員が新任ですが、それぞれの立場から積極的にご発言いただき議論が深まりました。

事務局からは、基本施策の1から6について、取り組み内容及びこれまでの成果・課題を報告し、それぞれについてご意見をいただきました。

ここでは、総括として宇野先生からいただいたご指導・ご助言を紹介します。

- 外国籍児童生徒への支援をはじめ、インクルーシブ教育のうねりを感じた
- 行政・保護者・コミュニティ「違った人たちで一緒にやろう！」が大切
- ICT利活用の波に特別支援教育も乗り、成果を整理・共有する
- 多様な学びの場を自由に選択することが自立につながる「子供に委ねていく」
- スマイルブックは、支援をつなぐツール。活用の好事例を広めていく
- 『児童発達支援センターわかば』開所の意義は大きい。縦の連携の核となる

この会議、毎回時間が足りません。それだけ、インクルーシブ教育へのニーズや期待が大きいのだと実感します。いただいたご意見をプランの具体的な取り組みに落とし込み、多治見の“自立を支援する教育”の充実に努めていきます。

本物に触れる ～子どもメディカルスタッフ体験ツアー～

7月20日（土）は、市民病院で『子どもメディカルスタッフ体験ツアー』が開催されました。市民病院から、将来、医療系の職に就きたいという夢や希望をもっている子供たちに“本物の体験をしてほしい”というお話をいただき、これまで保健センターと教育研究所も協力してきました。モデルを使った腹腔鏡手術・心臓カテーテル・調剤・エコーでの血管造影など、参加した26名の高学年児童にとっては、当然、全てが初めての体験ばかり。それでも医師や看護師、薬剤師などのスタッフから手取り足取り教えていただきながら興味深く体験に臨んでいました。体験内容や会場の都合で人数が限られ、抽選に漏れた子どももたくさんいますが、好評につき第2弾の計画も?!子どもにとっては、体験すること自体が大きな学びであることを改めて感じる時間でした。

